

吉野林業の転換点

—山守の素材生産活動を中心として—

○井戸田祐子・川村 誠（京大農）・植木達人（信大農）

1 目的と方法

吉野林業地域は、人工林の大径材資源を有する世界的にも唯一の地域である。当地域の長伐期林業は、山守制度という特有の経営組織と密接な関わりによって維持されてきたと考えられる。しかし、高級造作材を中心とした大径材マーケットは大きく変化している。今後の吉野林業の方向性を検討するにあたって、山守の活動状況を中心とした類型化から、長伐期林業に果たしてきた山守の役割と今後の可能性を検討したい。

2 分析と結果

山守としての活動の活発さは収入依存度および雇用労働力の有無に大きく左右されていると考えられることから、山守業収入が全収入の50%以上をしめ、さらに通年の常用労働者を1人以上雇用している経営的山守、山守業収入が全収入の50%以上を占めるが、常用労働者は雇用していない自営的山守、山守業収入は50%未満で、ほかに主とする生計手段をもつ副業的山守、山守業収入は50%未満で、諸事情により今後山守として山林を管理していく意志がない放棄的山守の4つに類型化した。現在の素材生産は経営的山守、自営的山守によって担われている。山守の多くは、管理山林において育林業と素材生産業の両方を統一的に担ってきた。そのことは資源的に見れば、長期的視点をもち、林地の生産力を損なわない集約な生産技術の適用を支え、長伐期林業を支える一つの要素であった。日常的な土地管理としての境界見回りは、収益性の高い素材業を獲得するための奉仕作業的側面を持っていた。しかし、副業的山守を中心に、素材業の縮小、境界見回りも不十分になる傾向にあり、これは育林業と素材業の分離の可能性を示すものと考えられる。

山守類型	管理規模	土地管理	育林	素材業	山主
経営的山守	・300ha以上:12人 ・100~299ha:5人 ・50~99ha:1人 ・50ha未満:1人	・年1回以上の見回り	・すべての山守が実施 ・雇用労働者の仕事確保 ・自己所有山林での作業も	・行っている:100% ・小規模山守では村外での素材生産も	・大規模山主中心
自営的山守	・300ha以上:3人 ・100~299ha:5人 ・50~99ha:2人 ・50ha未満:4人	・年1回以上の見回り	・ほとんどの山守が実施 ・山守自身が作業する場が多い	・行っている:98% ・今後は不明:2%	・大規模山主 ・その他の中規模山主の複合
副業的山守	・300ha以上:1人 ・100~299ha:8人 ・50~99ha:9人 ・50ha未満:24人 ・不明:6人	・3割の山守は10年以上見回りを行っていない	・過去5年間に1ha以上の作業を行ったものは30%未満 ・自らは山林作業できない山守もいる	・行っている:33% ・今後は不明:21% ・止めた:19% ・もともとやっていない:23% ・不明:2%	・その他の中・小規模山主 ・自己所有山林中心
放棄的山守	・100~299ha:1人 ・50ha未満:4人 ・不明:3人	・ほとんど山の見回りを行っていない	・行っていない	・今後は不明:12.5% ・止めた:12.5% ・もともとやっていない:50% ・不明:25%	—

(連絡先: 井戸田祐子 yidotan0716@yahoo.co.jp)